

[講演要旨] 享徳三年(1454年)に奥州を襲った津波

産業技術総合研究所 活断層・地震研究センター 行谷 佑一

新潟大学人文学部 矢田俊文

§1. はじめに

観測史上最大の規模(Mw9.0)を記録した2011年東北地方太平洋沖地震による津波は、沿岸部に甚大な被害をもたらした。例えば国土地理院の調査によると、宮城県石巻平野や仙台平野では海岸線から数km内陸にまで浸水した。一方津波堆積物調査によると、西暦869年貞観地震の津波は同平野で広く浸水し、その広さは当時の海岸線から3km以上内陸に及んだ(例えば、澤井ほか, 2007, 活断層・古地震研究報告; 宋倉ほか, 2007, 同書)。

過去に巨大地震が何年程度の間隔で発生したかを知ることは、長期的な地震発生メカニズムを考える上で重要な情報である。東北地方の場合、貞観地震と2011年地震との間にこのような巨大地震が発生したかは、実はよくわかっていない。歴史史料の立場から見ると、宮城県沿岸に広い津波浸水をもたらした可能性のある地震は、例えば享徳三年(1454年)の地震(例えば、保立, 2011, 季刊東北学)や慶長十六年(1611年)の地震(例えば、都司・上田, 1995, 歴史地震)が挙げられる。享徳三年の地震については、宇佐美(2003, 東大出版会)に取り上げられておらず、現象として何が起きたかについて、学界の中でも統一されていない。

そこで本発表では享徳三年の地震津波に注目し、歴史史料を精査することで同地震津波について「言えること」と「言えないこと」を整理する。

§2. 『王代記』に残る津波記録

享徳三年地震に関する史料は、『王代記』、『大宮神社古記録抄』、『会津旧事雑考』、『続本朝通鑑』、および『新撰和漢合図』の5書が残っている。

『王代記』は山梨市北の普賢寺(現在廃寺)に伝わっていた書物で、同寺の住職等が代々受け継いで書かかれた一種の年代記である。これには、「同(享徳)三年甲戌十一月廿三日夜半天地震動 奥州ニ津浪打テ百里山ノ奥ニ入テ人多海ニ入テ死」と記録されている。「奥州」とは陸奥国であって現在の青森県、岩手県、宮城県、および福島県を指す。従ってこの記録は、「享徳三年十一月二十三日の夜半に大きく震動し、東北地方太平洋沿岸のどこか(あるいは全部)で津波が浸水して山の奥まで海水が入り、多くの人が海にさらわれて死亡した」と解釈される。磯貝・服部(1976, 文林堂書店)によれば、別系統の史料を

併せ見ることによって、『王代記』の記事は史実を表している、と評価されている。すなわち、享徳三年に奥州に津波が襲った可能性は高いと言える。

§3. 地震に関する記録

他の史料については、千葉県夷隅郡御宿町の大宮神社の『大宮神社古記録抄』に「享徳三年十一月二十三日夜子丑尅大地震ヨルヒル入」、寛文十二年(1672年)に成立した会津藩の編纂書『会津旧事雑考』に「享徳三年十一月二十三日夜大地震」、寛文十年(1670)に幕府の事業で作成された林鶯峯による『続本朝通鑑』に「十一月庚午地大震」、および永禄八年(1565年)に成立した『新撰和漢合図』に「享徳三年甲戌十一月二十三日、大地震」という記録が残っている。

いずれの記録も「大地震」が記録された記事であるが、「どこで」感じたかが記されていない。注意しなくてはならないのは、例えば『会津旧事雑考』に地震記録が書かれていても、それが会津における有感記録であることを必ずしも意味するわけではない点である。『会津旧事雑考』は会津藩主の保科正之の命によって向井吉重が編纂した書物であるが、その典拠については不明である。従って、会津で感じられたことが書かれたのか、それとも広く一般的なことを書かれたのかが判断つかず、会津における揺れの記録であるとは断定できない。この他の史料についても同様なことが言えるために、現存する地震記録からは『王代記』の記録も含めて、どこが「大地震」であったかを積極的に言うことはできないと考えられる。

§4. 『大日本地震史料』の綱文

『大日本地震史料第1巻』(武者, 1941)には享徳三年地震の概要(綱文)が載せられている。それによると、「上野上総並ビニ會津強ク震フ」とあり、群馬県(上野)、千葉県中部(上総)、および福島県西部(會津)で強い揺れを感じた、とされている。「上野」が揺れた理由は史料から読み取ることはできないが、『大宮神社古記録抄』により「上総」が(千葉県御宿町は上総国)、『会津旧事雑考』により「會津」が揺れたと断定されたと考えられる。

享徳三年地震で今のところ確実なことが言えるのは、『王代記』の奥州に襲った津波のみであると考えられる。